

ダンジョンでFE風花雪月無双

門番

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

無双ルートの傭兵と、戦場の聖女、ワーカホリック2人組とも言える。

目次

第1話	プロローグ	1
第2話		7
第3話		12

第1話 プロローグ

力を振り絞って剣を握りこむ。

光と闇の衝突に、皆を巻き込ませてはいけない。

たとえ、この身を捧げてでも。

彼は傭兵であるが、策略家ではない。何度時を戻したとしても、全身全霊で己のやることを貫き通すだけだ。人の身から遠ざかっていることもあり、己の死に恐怖することはなく、その先に視えるのは彼女たちが切り拓く未来だけだ。

「ベレトー」

何度も剣を交え、今は肩を並べて戦っている傭兵の声だ。

表情がほとんど変わらない彼は笑みを浮かべた。

光と闇の魔法がぶつかり合う前に、彼は飛び込んだ。

「これで終わらせる！」

その剣は、確かに天を裂いた。

『双翼の英雄ベレトーIIアイスナー』

その名は歴史書によって、最後の皇帝エーデルガルトと共に語り継がれている。その経歴は謎に包まれているが、皇帝直属の軍において重用されていたことは確かであり、もう一人の英雄と共に数々の戦いで武功を立てている。

しかし戦争終結以降は消息を絶っており、最後の戦いで名誉ある戦死をしたという説が有力である。

オラリオ最大規模といえる治療院は慌ただしかった。

多くの重傷者が運び込まれており、エリクサー含む回復薬の在庫も

切迫している。いつもはお金稼ぎにがめつい主神も、オラリオ及び神々の危機として、まるでちゃんとした神のように、珍しく真剣な表情でテキパキと眷属に指示を出していた。

そして、全身血まみれで倒れていたらしい青年は、いまだ13歳の少女に治療が委ねられた。といっても、彼女は恩恵を刻んだ時点で治療魔法を会得しており、医療系ファミリアにおいて将来有望な人材といえる。

「ひどい。ここまで痛めつけるなんて……」

治療院の仕事に真面目な彼女は、闇派閥イヴァイルスに怒りを憶えながら、彼女は治療魔法を使ってある程度の傷を塞いだのち、慣れた手つきで包帯を巻いていく。いまだLV. 1で少女ということもあってその魔力量も体力も少なく、治療した彼女自身に疲れが見えていた。

「……此処は何処だ？」

「！…もう目覚めましたか。」

その瞳の蒼色は、少女のものとよく似ていた。

まつすぐな視線にほんの少し少女はたじろいだ。

ベレトは包帯に包まれた身体の調子を確認しつつ、周囲の確認をする。

常に纏っていた黒い鎧は残骸となり、羽織っていた士官学校の制服はもうボロ布だ。愛用の『鉄の剣』はまだ使えるが、もう1つの剣は役目を終えたのか刀身の半分から折れてしまっている。そして、ここは治療院の1室のようだが、見覚えはない。ここは帝都なのだろうか。

「不思議な感覚だ」

「……安静にしてくださいますか？」

少女が低い声でそう釘をさす。恩恵を刻んだため一般人よりは強いが、しかしいまだ非力な少女だ。彫刻のように鍛え上げられている彼を抑えつけるためにはまだステータスが足りない。ベレトはおそらく『痛み』に顔の表情を歪めながらも、寝台から降りて、包帯の上からボロ布を羽織った。

「ほう。恩恵無しが、もう起きれるのか」

「……あんたは？」

白い髪で白い髭、しかし若々しく豪傑さも感じさせる老人からは、かつて身近に感じていた女神に似た雰囲気を感じる。清潔な『ビショップ』の服を着ているが、高価そうな指輪がその清廉さを台無しにしている。

「こちらはディアンケヒト様で、私たちのファミリアの主神です」

丁寧な所作で紹介してくれている銀髪の少女は『プリースト』のようだし、ファミリアというのは傭兵団のようなものだ。ベレトは理解した。その団長が神そのものであるのだというし、『この世界』は自分がいた世界より神秘に溢れているようだ。

異世界に来るのは久々だし、今回は帰る術もない。

それに、あの世界でやることはやりきった。人の手にはあまる戦いは十分こなしたため、後の変革や政治は彼女たちに任せればいい。傭兵稼業なんていつしんでもおかしくないものだし、老いてきた父も平和な世界で穏やかに余生を過ごすことだろう。

「ベレト、異世界フォドラの傭兵だ。この恩は仕事で返そう」

「嘘はついとらんな。その禁忌を犯した剣の存在についても聞いておきたいが……」

人は、神に嘘はつけない。ベレトの事態の飲み込みの早さと、人の身ですでに美しいアミッドに現を抜かさずまず主神に感謝する姿に、ディアンケヒトは髭をさすった。これだから『下界は面白い』と感じた。傭兵と名乗ったことも嘘ではないし、恩恵が無い状態でも実力がありそう。最近のファミリアの出費を取り戻すことに大いに役立つことだろう。

「ふむ。ちょうどよいな」

「ディアンケヒト様……？」

いまだ少女のアミッドは、2人の男性のやり取りについていけず、口を挟まず状況を見守っていた。

「ガハハハ、お前さんは永久雇用させてやってもいいぞ。大サービスじゃ！ はよう背を向けよ！」

「……あまり時間はないぞ」

こやつをもし戦闘系ファミリアに取られたのなら、即戦力であることや将来性を見ても、それこそ大赤字になりうる。義理堅い性格からして『改宗』コンバージョンなんてしないだろう。どの神も喉から手が出るほどの『個体』だ。

たとえ、闇派閥が重要拠点であるこの治療院を壊すべく、武器を構え始めていることには早急に対処すべきとはいえ、すぐにでも眷属にしておきたい存在だ。

「ブワツハツハツ！ 予想通りじゃー！」

背中に己の血で恩恵を刻みつつ、やはりこやつはまるで造られたかのように『器』として最適すぎる。読み取れる神聖文字から、すでに魔法もスキルも発現しているのにランクアップまでも可能だ。そして、人の身でありながら『神の力』アルカナムの残痕すら感じ取れる。

「さあ、儂に喧嘩を売っているやつらを一人残らず倒してしまえ！」

「了解した」

剣を握りこみ、黒い上着をたなびかせて窓から飛び出した。

アミッドは咎めようとするが、もう追い付けない場所だ。

「闇派閥があんなに!？」

「ようやく気付いたか。おぬしもまだまだじゃのう」

といつても、戦闘系ファミリアではないため、このファミリアの平均レベルは2にも満たない。ダンジョンの中層以降に出向いたことがない者が多い。そのため、今回の有事には他のファミリアの戦力に期待するしかなく、治した怪我人に治療費の返済の意味を込めて戦わせ、このファミリアを主神なりに守ろうとしていた。

慌てて戦闘に出向いてくれる冒険者を見て、此度の戦は勝てると思込んだ。

「しかしもう少し、時期が早ければ良かったのだがな」

誰が好き好んで、かわいい眷属たちを危険にさらすだろうか。医療系ファミリアということもあって真面目な眷属が多く、救護班としてダンジョンに向かった者さえいる。外的要因とはいえ、死傷者でどのファミリアも世代交代を余儀なくされているし、場合によってはファミリアの崩壊さえ招いているのがこの『暗黒期』だ。

「私に、できることは……」

『神の力』が制限されている神たちは無力さを感じていた。

アミツドや、あやつに任せるしかない。

「身体が重いな……」

灰色の空の中、切り伏せた血を振るい落としたベレトは、後付けで力を得たとはいえ、全盛期には程遠いことを感じていた。そしてそれ以上に、痛みと即死の危険性を感じとっていた。ソテイスの力はほとんど失われてしまつて『あれ』は使えないようだし、一網打尽にできる『遺産』も使用不可な状態だ。

肩で息をするというのにもいまだ慣れない。

『癒しの滴、光の涙、永遠の聖域』

詩が聞こえた。

少女の真剣な眼差しが視界に入る。

輝く魔法円を見て、戦況を把握した。

目算で4Mほどか。ならば。

「剣技『火薙ぎ』！」

剣に纏わせた炎は竜巻となり、敵を膠着させる。

詠唱なしで魔法を行使して同時に剣技も行う技術。

「私が癒す！ 『ディア・フラーテル』！」

少しでも多くの戦士たちに届くように、アミツドが魔力をつぎ込んで発生させた魔法円の限界距離だ。ベレトが魔法の発動に間に合うように一度後退し、再び最前衛に戻っていく技量とスピードに、術者であるアミツドは舌を巻く。

羽織った上着がたなびく背中はとても大きく見えた。

倒れ伏した冒険者たちは癒され、勇気を与えられ、再び立ち上がる。

「俺につづけー！」

無表情のまま同胞を斬っていく姿に、闇派閥では『灰色の悪魔』として警戒された。

——これは、異界の傭兵が戦場の聖女の隣に立つ『眷属の物語』

第2話

今日も多くの冒険者が『豊饒の女主人』に来ていた。冒険者になったばかりのベルⅡクラネルもその1人だ。

男性冒険者はさらに顔を赤くして、女性冒険者はちらちらと視線を向けながらうっとりとした表情を浮かべ、ともかくいつもより酒場がうるさくなかった。

初めて訪れた酒場で縮こまって、キョロキョロしたベルは、みんなの視線の先に、男女ペアがいることに気づいた。

優雅にゆったりとパスタを食べる銀髪の女性は、彼の意中のアイズ・ヴァレンシユタイン程の美しさを誇っている。ウェーブがかかっている色も違うが、腰まで届く綺麗な長い髪を見て、ベルは顔が熱くなるのを感じた。

そして、その対面にはどんどん料理を胃に収めていく美青年がいた。黒みがかかった青の髪が落ち着いた夜空を思わせる。10人前を超えるような料理の数々をペースを崩さず食べており、幻聴で『うまい！うまい！』と聞こえてきそうだ。

それぞれ黒の鎧、黒のバトルドレスを身に纏った2人も冒険の帰りのだろうか、まさしく釣り合っている美男美女ヒーマンのカップルだ。あの雰囲気ではだれも声をかけられないんだろう。

ベルは、僕もあれくらいかっこよかつたらなと、脳裏に浮かんだアイズさんに少しでも振り向いてもらえるのだろうか、肩をさらに落とした。

「ベルさん、嫌な時は美味しいものを食べて元気を出しましょう！」
「あ、ありがとうございます！」

銀色の髪をセミロングにしているシル・フローヴァが、注文したパスタとサラダを机に手際よく並べてくれた。その励ましに、落ち込んだばかりいられないと奮起して、感謝を述べて冒険でペコペコだったことによく気づいた。

食べ始めたところで、シルはこつちを向いて手を挙げる青年のオー

ダーを取りにいったようだ。

(まだ食べるの!?)

あれくらい食べないと、英雄のように強くなれないのだろうか。青年の横には2本の剣が立て掛けられており、鞘のない1本に至っては見たこともない材質だし、かなり高いレベルの冒険者なのだろう。

「いやー、相変わらずよく食べる方ですね」

ベルに聞かせるように、戻ってきたシルはそうつぶやいた。

「えっと、あの人たちは？」

「ディアンケト・ファミリアの団長とその補佐の方です。かなり有名な人たちですよ」

医療系としては最大の派閥だと聞いたことがある。戦闘系ファミリアを重視してファミリアを探していたため、その時は選択肢として除外したが、あんなに強そうな人たちが団長たちだなんて思わなかった。

もつと詳しく聞きたそうなベルに、シルは微笑んだ。

「団長は彼女、戦場の聖女(デア・セイント)と呼ばれるアミッド・テアサナーレさんです。オラリオ最高の治療師でありながらL v. 4、並みの冒険者よりも強いと聞いています」

いまだL v. 1のベルは、ごくりと息をのんだ。

レベルがすべてとは言わないが、それでもだ。

「そして彼のほうが、今は2人しかいないL v. 8、灰色の悪魔ベレト・アイスナーさん」

「れ、レベル8!?!」

彼のアドバイザーであるエイナ・チュールから、アイズがL v. 6ということを知っていたが、それ以上の存在に驚愕する。オラリオ最強の冒険者の1人が目の前にいることは奇跡かのように思えた。

「同じくL v. 8の猛者オツタルとはライバルという噂です。でも深層でたまたま会おうと、パーティーを組んでダンジョンに潜っていると聞きますね」

「たった、3人で……?」

ベルからも『憧れ』で見つめられても気にせず、ベレトの食事はい

まだ続いていた。アミッドはナプキンで口元を拭きながら、なぜかこちらをジト目で見てきたため、慌ててベルは視線を少し落とした。

「2人で冒険者の救護活動を行っていることもあって、ファンもかなり多いと聞きます。それにあの時にも……おっと」

もつといろいろ聞いてみたいが、外が騒がしくなり、シルは入り口へ向かっていった。

「いらっしやいませー!」

またまた美男美女が多数いる集団が入店してきた。

その中に意中の相手がいることに目ざとく反応したベルは、机に突っ伏すかのように息を潜めた。まさしくロキ・ファミリアの幹部たちであり、そこに所属する有名人の多さに、ほかの冒険者たちはまた感嘆の表情を見せていた。

「今日は宴や、飲めえ!」

主神であるロキの音頭に、乾杯を交わし合っている。

個の力ならば、ようやく食べ終えていまだ腹8分目の表情を浮かべているベレトのほうが上だが、集団で伸びていつている彼ら彼女らは、かつての2大ファミリアに届くくらい成長していくことだろう。

祖父譲りのハーレム願望を含めて、冒険者仲間がいることにも『憧れ』を持つベルは、高い目標だと感じた。

金髪の小人族、緑髪のエルフ、髭のドワーフの3人が、ベレトやアミッドに話しかけた。

「やあ、先日は助かったよ。2人のおかげで皆無事に帰還できた」

「あの階層の被害は大きく、疲弊していたからな」

「はい。どういたしまして」

強者の領域には同じロキ・ファミリアメンバーでも萎縮するようだ。団長とお酒を飲みたいアマゾネスや、ハイエルフ様を囲いたいエルフたちは早く戻ってきてほしいと、様子をうかがっている。

「そうだった。報酬はディアンケト様に捧げよ」

「ごほん。お気になさらず」

ふと思いついたかのように告げるベレトを制して、アミッドは冷静にロキ・ファミリアメンバーを見渡した。

「治療院に来なければならぬ方も、どうやらいないようで何よりです。ただ、お酒は飲みすぎですが」

「おいしい、そう固いことをいうな」

ずつと年下の女性の忠告は気にせず、ドワーフは酒を流し込んだ。種族的に酒に強い彼以外も、遠征帰りで羽目はずしすぎているらしい。

「そうだアイズ、今日起こったあの5階層の話聞かせてやれよ！

あの逃がしたミノタウロス!!」

「それって、17階層で遭遇したやつ?」

特に酔った狼人が騒いでいる。あまり気分が優れない様子の子のアイズの代わりに、アマゾネスの女性が質問した。それでもアイズに聞かせるべく、話が支離滅裂ながらも、上機嫌に話をつづけていった。

アミッドは5階層にイレギュラーが起こった事実を顔をしかめ、ベレットは顎に手を当ててそのイレギュラーについて考え込む。偶然にも、彼らが解決してくれたようだが、冒険者に成り立ての者が多い階層だから、大きな被害が出てもおかしくない。

ロキ・ファミアの幹部はやれやれと、場を鎮めるかと若手たちのところへ戻っていった。

「雑魚に、アイズ・ヴァレンシユタインは釣り合わねえ」

そのとき、入り口で騒音が鳴った。

一瞬静寂が訪れるが、また酒場は騒がしくなる。

幹部たちを巻き込んで、宴会を続けようとするくらいだ。

「あの子……」

小さくなっていく背中や白い髪を、アイズの瞳は捉えた。

『食い逃げ』すらも笑いの種にしており、男性冒険者は『捕まえてやろうか』と女性店員に声をかけている。といつても、店主含めて多くの店員が不満そうな表情を隠せていない。心配そうにどこかへ向かっていく背中を見つめた。

その中で、1人は口許が緩んでいた。

「……だいたいわかった」

そうつぶやいたベレトは1人の女性を一瞥して、アミッドと共に立ち上がった。

ミノタウロスの残党がいたらいけないし、何よりもあの少年が走って向かった先はダンジョンだ。

第3話

ナイフでモンスターを切る。

ベルにとつての戦術なんて、我流のヒットアンドアウェイしかない。

ヒーラーもおらず、しかもソロであり、回復薬すら心もとない。急に飛び出してきたから、防具だってない。たった1つのミスが『死』に繋がるダンジョンにいる。今のベルにとつては凄まじい強さを感じたミノタウロスの件もあって、普段よりダンジョンは冷たく感じた。

しかしいつもよりベルの頭は冴えていた。冒険者として冒険をするのでもなく、強さに飢えた狩人としてダンジョンに籠り続けている。魔石を回収する気もなく、強引なレベリングともいえる。

『雑魚じゃあ、アイズ・ヴァレンシュタインには釣り合わねえ』、あの言葉を聞いて、今の自分がどれだけ惨めか思い知らされた。狼人が酒に酔って高らかに述べたその言葉は何度でも頭をよぎる。確かに、かの美しい女性は引く手あまただろうし、自分がその隣に並び立てるようになるまで、その隣が空いたままとは限らない。

急げ、早くランクアップしないと。

『冒険者は冒険してはならない』という戒めが脳裏によぎるが、ベルは首を振ってすぐにかき消す。そしてベルは、再びナイフを握りこんで、蛙のモンスターの腹に刺突した。

「しまッ!？」

安物かどうかよりは、ベルの武器は細身のナイフだ。急所を狙った刺突ならまだしも、基本的に切り裂くということが求められる。無理に刺さったことで抜きづらいナイフを握ったまま、焦りつつもベルは思考を止めない。

「くそっ！」

ナイフの柄から手を放せば、その腕の攻撃を躲すことができる。しかしその後はまず取り返すという作業が必要になる。焦りもあってまるで押し倒すようにさらに突き刺すという暴挙に出してしまった。

「たお、れるオオ！」

声に出るくらい両腕に力を入れて、全身で押し込む。

もしゲームのようにHPがあつたのなら、いつか倒せたのかもしれないが、ここは現実のダンジョンだ。もがくモンスターの腕は、鞭のようにベルの身体を打ち付けていく。

さらに、モンスターの断末魔は同種を呼び出してしまった。ベルは気づいていないが、その背中を襲うべく、モンスターが飛び込んでくる。

ドンツという音が背後で鳴る。

「油断するな」

人の声に慌ててベルが振り返ると、黒い上着がまるでマントのように風になびいていた。

その紺色の髪の毛の青年ベレトは、凄まじい速さで少年と蛙モンスターの間に入り込み、拳でモンスターを弾き飛ばした。6層のモンスターに本気でやれば身体を貫通するので、手加減もしている。

「貴方はさっきの……」

振り向きざまに、黒い鎧に包まれた腕を振るえば、その速さは今のベルには見えない。ベルの下にいたモンスターの脈を斬り絶命させ、すでにロングソードをまた鞘に納めていた。

返事をする前に、ベレトはベルの腕を握って立たせた。

「ディアンケヒトファミリアの剣士、ベレトだ。君は？」

「ベルです」

いい名だ、そう伝えたベレトは、剣を抜いて次の敵と相対した。

「来るぞ」

「あれは……人なんですか？」

その幽鬼的な動きは、まるで死体が歩いているようだった。

「異形兵だ」

「イギョウ、ヘイ……？」

鎧を身に付けた姿は冒険者のようで、しかしモンスターのようでもある。赤く光る傷口からは紫煙を吹き出しており、その鋭い瞳も赤く輝いていた。ボロボロになった武器を構えてこちらに向かってきており、今にも襲ってきそうだ。

「た、助ける方法は!？」

「ありません」

焦ったベルに答えたのは金属のブーツを履いた女性だ。身長差もあり、ベルは振り返って見上げる途中で、スカートの下から伸びる白い肌が目が行ったが、少し首を振った。

「もう、モンスターと思って構いません」

「甘さを見せればこちらがやられる」

黒いバトルドレスを身に纏ったアミッドは、ベレトよりずっと軽装で動きやすさを重視している。『神秘』で軽量ながら耐久の高い装備にして、さらに発展アビリティで『機先I』で魔力と敏捷を上げてもなお、ベレトやオツタルに置いていかれそうになるのは悩みの種だ
が。

「それにしても、私たちがいなければあなたも死んでいましたよ?」

「ヒイ!？」

アミッドが青みがかった紫の瞳で鋭く叱りつけると、ベルは悲鳴を上げた。

しかし、異形兵が迫って来る状況でこうしたやり取りができるのも、余裕の現れなのだろう。少し前に歩いて剣を構えているベレトの背中は、とてつもなく大きく感じた。彼が背負った巨大な剣を使う必要もないのだろう。

「リブロー」

「えっ、傷が一瞬で!？」

アミッドはその背丈より大きな杖を一度振るい、無詠唱の治癒魔法を唱えた。たちまちベルの傷口は消え、痛みも感じられなくなった。さすがに流した血や、穴の開いた服はそのままだが、失った体力による倦怠感すら消えている。

これなら戦えると、ベルは異形兵に向き直った。

背中がなんだか温かく感じ、勇気が湧いてくる。

「やれるか?」

「やります。やらせてください」

なんて贅沢なパーティーなのだろうか。たとえ自分がいなくとも

倒せるんだろうけど、これだけ整った環境でこのモンスターを倒しきれないなら、彼女の隣にはずつと立てないままなのだろう。

ベルは再びナイフを構えて、敵を観察する。

「所詮は人型のモンスターだ。弱点は同じと思っていいい」

「はい！」

男たちに付き合って、アミッドも杖を構えた。

「光の風、呪いとなれ。駆け抜け、光跡を与えよ」

『トーパーウィンド』という光輝く風の刃を、見切れず直撃した異形兵は一瞬怯むが、その程度の威力では倒しきれない。しかしアミッドの本領はヒーラーでありサポートだ。光の力は時に呪いとなり、相手の力と魔力と敏捷を弱める。

それが始まりの合図となり、異形兵はベレトの威圧に攻めあぐねていたが、本能のままにこちらへ向かってきた。

振り下ろされる剣と、ベレトの剣がぶつかり、甲高い音が鳴る。

「そこだアア！」

両手で握ったナイフを首筋に突き立てたことで、異形兵は吠えるように叫ぶ。

「負けるもんかア!!」

鎧の隙間の身体はまるで人間のようで、カエルのモンスターとは違っていて、なんだか、ゾクリとした冷や汗が流れるのを感じたが、叫びながら闇雲にナイフを押し込んでいく。全身でナイフを押しこんでいくと、やがて軽くなった。

頭を失った異形兵は膝から倒れ、灰になるように崩れて風に吹かれていった。武器や魔石すら残さず、本当に存在していたかどうかも分からないくらいだ。

「ハアハア……」

「よくやった」

ベルは両膝をついて、震える手のひらをギュツと握りしめた。ベレトが声をかけながら、剣を鞘に納めた。

「さっきの、人だったんですか？」

「甘さを見せればこちらがやられる」

ベルの震える眩きに、ベレトは先程と全く同じ答えを返した。

次は、自分で立つのをベレトも待つことにした。

ベルもさすがにホームへ戻ることとなり、地上へ向かってゆっくり歩いていく。毎回へとへとになりながら登っていくベルも、この2人と一緒だからか足取りが軽く感じた。といっても、さつきのがきがかりではある。

「私たちはもう何年もダンジョンに潜っていますが、ここ3年くらいで現れるようになりました」

ウエーブのかかった銀髪を揺らしながら歩いていたアミッドが、前を向いたまま説明した。

「初めは冒険者の亡霊と言われていましたが」

「俺と同じく異界から来たんだろう」

「べ、別の世界から？」

どういふことか気になって聞いてみると、相変わらず異界から来たという肯定の返事が返ってくる。神ではないが、疑うこともあまり知らないベルは、嘘ではないんだろうと判断した。

ベレトもアミッドも、異形兵に関しては発生理由も分からないと伝える。

しかしこんな上層に現れたのは初めてであり、偶然とはいえ、いつも通り討伐ができて運が良かったとも言える。対人戦に慣れてない冒険者にとって、異形兵を相手に命を落とす例は少なくないからだ。ミノタウロスといい、最近は奇妙なことがよく起きている。

「そ、それにしても、すごく大きな剣と杖ですね！」

「まあ、それなりに稼いでいますから」

「団長だからいいんじゃないか」

ベルは明るい話題へ変えるべく、2人の背中を見て何気に言った言葉だが、意外と地雷だった。

レベル6の九魔姫の杖に匹敵する数億ヴァリスのお金がかかっているとすると、いまだレベル4のアミッドはさすがにこの杖は荷が重いと感じていたからだ。がめつい主神が彼らの金を使って作らせたともいう。それに、マイン드의自動回復ができるアビリティ『精癒』を

自分自身で持つておらず、代わりに翠色の魔宝石を使った杖の性能に含んでいる。

武器をいつ失うか分からないダンジョンで頼りきりの状態というのも良くないし、ていうか『精癒』があればもつと治療院で働けるし。「この天帝の剣は壊れやすくてな。それに大きい・重い・運びづらい。だから不壊属性がついた剣を基本的に使っている」

『重いとはなんじゃ!』と子どもの声が聞こえた気がしたが、気のせいだろう。ていうか、不壊属性があるほうがずっと前線で戦ってられるのだから、武器の耐久なんてないほうがいい。

やはり2人はワーカホリックだ。

そして、地上まで戻ってくると。

すでに朝を迎えていたようだ。

「俺たちはギルドに寄ってからホームに戻る」

「何かあった時には治療院まで来てください」

ベルの手を、アミッドはシルクの手袋で手に取り、その上にガラスの瓶を2本置いた。

「え、これは?」

「ポジションです。私たちの主神には内緒ですよ」

少しかがんで、人差し指を口元に当てて微笑んだアミッドに、ベルはまるで湯気が出るように頬が熱くなった。ちなみにベルはミアハ及びナアーザからもポジションを融通してもらっている。

「今日はゆっくり休んで下さいね。体力までは回復できませんから」

「また会おう、ベル」

「は、はい! ベレトさん! アミッドさん! ありがとうございますいまし—!」

アミッドの隣にはベレトがいて、まだ会って間もないが、お似合いだと感じた。ベルもいつかはああやってアイズさんと歩いてみたいと、憧れを抱いた。

まずは言われた通り、身体を休めようと、ベルはホームに向かって走りだした。